

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

序文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008624

序文

塚田誠之

国立民族学博物館

広大な国土に多くの民族が居住し膨大な史料を持つ中国における歴史の資源化の研究は従来未開拓であった。現在、中国の急速な経済発展にともない、歴史がさかんに資源化され、中華民族の一体性の構築に活用され、観光開発による実利の獲得など多様な目的と形態で進行している。中国は多民族国家であり、公定の民族とその下位集団やさまざまなレベルの集団がある。歴史のなかで無数の出来事が起こり多数の個人の生死がある。歴史は民族や集団、個人によって多様である。また、記録され文物として残される歴史はごく一部に過ぎない。歴史の資源化は、特定の出来事や人物が注目される側面があるが、一般の民衆による何らかの慣習的行為や集団・個人のアイデンティティの維持のための歴史の活用などもまた、資源化の一つとして考えられる。どのような多様な歴史があり、その資源化がどのようになされているのか、そして誰が何のために誰に対してどのように資源化を行うのが問題となるのである。

本書は、中国における歴史の資源化の現状と課題について、2部構成で、研究の現状の中間的な報告をするとともに、課題を明らかにすることを目的とする。すなわち、第一部は、2016年10月22日に開催された国立民族学博物館国際シンポジウム「中国における歴史の資源化—その現状と課題に関する人類学的分析」(責任者塚田誠之)における6本の報告とコメント・討論・総合討論の記録を提示する。本シンポジウムは国立民族学博物館の研究成果公開プログラムの一環として、また、科学研究費補助金による研究「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(代表者塚田誠之、基盤研究(A)、課題番号JP15H02615、2015年4月-2018年3月)および国立民族学博物館共同研究「資源化される『歴史』—中国南部諸民族の分析から」(代表者長谷川清、2014年10月-2018年3月)との合同で開催された。第二部は、これら中国における歴史の資源化に関する研究プロジェクトの成員のうち7名の論文を、研究の中間的な報告として掲載した。それらの報告はともに、民族英雄、史跡・景観・文物、記憶・記録・伝承といった問題領域を中心として、政府・知識人・民衆等の諸主体の役割、諸民族の文化とのかかわりに注意しつつ、最新の現状を検討したものである。

第一部

次に報告の内容の簡単な紹介をする。第一部では、まず「民族英雄」とされる人物の顕彰のされ方やその民族・地域社会の持つイメージと資源化の実態が検討された。先述

のように歴史を資源化する主体は、政府・知識人・マスメディア・一般民衆等複数あり、それらが互いに対立・交渉・妥協しあいながら資源化の潮流を作り出している。たとえば政府が「民族英雄」を創出し、公的に宣伝することによって民族を統合しようとする動きがみられる。その際にその「英雄」の儀礼や祭祀に諸主体がどのように関わっているのだろうか、そうした点に留意した検討が行われた。

韓報告は、悲劇の英雄として杭州西湖の墳・廟などで祭られ、歴史上、項羽・関羽と並ぶ三大武神である南宋の武将岳飛について、どのように記憶され墳墓がどのように祭祀されてきたのかを検討し、王朝や国家、民衆、地方政府にとってさまざまに選択的に解釈されてきたことを明らかにしている。韓によると、歴史は、その時々の人によって構築され、現在の観点から取捨選択されるがために、その記憶は歴史的に常に変遷を遂げてきた。

続く松本報告は、明代永楽帝の時代に大航海を行った鄭和について、後世の歴史において再発見されてきたことや、現代の政治的な「一帯一路」構想の中でクローズアップされていること、墓や造船廠遺跡、また中国寧夏やクアラルンプール、ドバイで開催された記念シンポジウムにおける扱われ方の比較を検討している。とくに中国における評価は政治的な影響が強く、回族の英雄としてよりも中華民族の英雄として表象されがちなことが示されており、現代中国の政策において歴史的な英雄が資源として活用されている実態が明らかにされている。

ついで、文物・史跡・景観といった可視的なモノや建造物の資源化の実態と意味づけが検討された。中国各地にはさまざまな史跡が残されている。政府が史跡を愛国主義教育の基地として整備したり、史跡を観光開発などの実利と結びつける動きが見られる。建造物の中で古建築群が各地に残されているが、それらはいかに保護、開発されているのだろうか。廖報告では、桂林近郊の興安県の明清時代の古建築のならば村落水源頭村の保護と開発について検討がされている。村民、政府、企業が関与する「三位一体」のモデルとして観光開発の途上にあるが、しかし「模範村」として政府・村民がさらに資金を出したり、村民間の利益を調整したり、開発業者と村民との意見の調整、郷村博物館の建設の必要性などが論点であり、古建築の現状と問題点を浮かび上がらせている。

高山報告では、革命戦争の烈士の追悼のための空間である烈士陵园を対象として、烈士の位置づけをしたうえで、民国期の烈士陵园の様式、人民共和国におけるソ連流の社会主義的な要素の導入と中国特有の様式の創出が検討されている。そのうえで中国北部におけるソ連の影響や、そこで献花や儀礼を行う式典といった社会的な意義の重要性が提示されている。

さらに、記憶と記録・伝承の資源化が検討される。歴史は民間で記憶・記録され語り継がれてきたが、それはどのように伝承され、公的に編纂された史書と比較するとどのように異なっていて、伝承が民族のアイデンティティの拠り所としてどのように資源化

されているのであろうか。

稲村報告では、雲南のハニ族の歴史資料を、「内的歴史」すなわち口承史、ハニ（アカ）族の系譜を中心とした父系で語り継がれてきた伝承と、「外的歴史」すなわち土司の歴史や文書史料（漢籍）とに分類したうえで、それらの違いを検討している。前者は資源化され難いが、後者について民国期の雲南陸軍講武堂や土司の遺跡の一部の資源化が論じられている。

朝鮮族は近現代において、移住や再移動を行ってきた。権報告では、そうした移動のプロセスと民間人が立ち上げて近年著名になった民俗村「百年部落」の検討をしている。それは、村長が主導し村民が賛同して築100年余りの朝鮮族家屋を改修し、朝鮮族農民が移住してきた当初の生活を再現したこと、政府・メディア・専門家が相互補完的に役割を果たしたことが論点として示されている。

第二部

民族英雄として、第一部では岳飛と鄭和を取り上げたが、著名な英雄としてチンギス・ハーンは欠かせない。大野報告は、チンギス・ハーンの祭殿を取り巻く変遷について、1960年代前半の中ソイデオロギー論争期や文革期、1980年代以降の変化を明らかにするとともに、中国において近年、外来の漢人がチンギス・ハーンを資源として用いてモンゴル人を抑圧する状況や少数民族イメージの創出、チンギス・ハーンの「中華民族の英雄」としての扱われ方を検討している。現代史や国際関係史の脈絡でチンギス・ハーン政治資源化の一端が示されているが、こうした歴史的人物の政治的な利用は、先の鄭和の場合にも通じるものがある。

モンゴル族の信仰の対象として、歴史人物以外に、山頂や草原に立てられた石を堆積した聖所オボが挙げられる。藤井報告は、フフホト市の近郊や中央部について、観光地のホンゴル・オボ、シリントウのエルデニ・オボ、楊都オボの3地点について、観光化の動きとともに、観光化されない「反／非観光化」も見られること、観光化されても民間での祭祀が非観光化されている場合や、やはり聖地である泉のほうが観光化されオボが観光化されない場合が見られることが示されている。

眼を中国南部に転じると、長谷川報告は、辛亥革命に寄与し外敵への抵抗に貢献した雲南徳宏州タイ族の民族英雄、干崖土司・刀安仁について検討している。1980年代以降に再発見され、肯定的な評価が確定し、1980年代から90年代にタイ族知識人によって公式の歴史に復権を果たし、2000年代にはその思想や行動についてシンポジウムが開催され中国社会での認知度が高まるなど評価のプロセス、刀の故居の修復とその文化資源化、故居の記念館としての展示のされ方が検討されている。同時に、90年代以降の愛国主義教育の基地となり、国家側がメディアを活用して歴史文化資源としてのブランド化に成

功していることが示されている。

歴史的な建造物について、四川省丹巴県のギャロン・チベット族のもとには巨大な歴史的な塔「碉」が見られる。松岡報告は、その碉の種類と用途、すなわち高さの低い「家碉」もあって、神性を持ち笨（ボン）教と関わるがゆえに破壊してはならず、移住先でもそれを新たに造ることが村民に記憶されていることを示すとともに、2000年以降の政府や村民自らによるその観光化とそこでの碉の再生の実態が示されている。

景観は歴史的建造物以外にも、祖先に関する歴史記憶が埋め込まれた「場所」としての意味をも持つ。この点について河合報告では、広東省梅州市の客家、楊氏による2000年代における風水の良い始祖の墓や亭といったモニュメントを主体とする宗族公園の建設の経緯、そこで行われた秋祭りの過程、秋祭りの参拝者とその変化などが検討されている。公園の建設に際しては、風水が「迷信」とみなされることを避けるために客家ブランドを向上させようとする政策と足並みを合わせることで、中国経済の向上や多様なメディアツールによる宣伝、族譜の再編纂などによって、新たに近隣の省区からの参拝者・寄附者の増加が見られること、そうした変化のなかでも核心部分である始祖の墓をめぐる歴史記憶と参拝の「しきたり」が継承されてきたことが論点として示されている。

歴史を資源化する際には祖先以来の来歴や移住史、さらには独自性のある文化が必要にされる。塚田報告では、広西の漢族の集団「六甲人」について、移住史や言語、さらには居住・生業・飲食・婚姻習俗、年中行事などの習俗を検討している。六甲人の一部が壮族や侗族の影響を受けながらも、また歴史的に漢族と非漢族の中間を揺れ動いたものの、独自の歴史や文化が集団のアイデンティティ維持に役割を果たしてきたことが明らかにされている。

こうした移住史を記した歴史文書と資源化の関係について、吉野報告は、中国とタイのミエン（ヤオ）の事例から検討している。故地としての伝承のある千家峒が地名との照合で行政側によって手順を踏んで資源化されること、祖先伝承「盤王」は社会によって多義性を持ち、タイでも資源化されていること、さらにタイで祖先の来歴物語「飄遙過海」が資源化されているほかは犬祖神話「過山榜」は資源化されていないことが論点である。祖先の来歴や過去に関する文書は客体化されてはいても歴史を語る資源としては必ずしも資源化されていないことが示されている。

全体の報告の要点と問題点を簡単にふれよう。第一に、歴史の資源化をめぐる諸主体の関与のあり方が、それぞれの事例にもとづいて明らかにされたが、その状況は多様・複雑で、民族・国家・宗教・地域性等の諸方面の違いに関連している。なお、民衆の間で伝承される歴史があって資源化されているもののほかに、資源化されない、「内的歴史」として、また「反／非観光化」の方向に向かう歴史もある。

第二に、歴史は、その時々の人によって構築され、その時点の観点から操作的に取捨選択されるために、常に変遷を遂げてきた。民国期もすでに歴史化の対象になっている。

このように歴史は異なる価値観を持つ人々によって選択され構築され続けてきた。それゆえ時代や人の価値観に左右されるのである。また、歴史のもつ属性は多様であって、記録され政治的な意味合いを持つ歴史と、民衆の間で伝承される歴史とがある。

現状の問題点は多数ある。第一部のシンポジウムのコメント・討論を例にとってみると、たとえば岳飛と関公（羽）など競合する他の民族英雄との比較検討の必要性がある。この視点は、古民家観光で成功している村についても有効で、価値が多様かつ相対的であるゆえ他の村との比較検討が必要になってくる。また、民族英雄についてエスニックな面とナショナルな面、そしてローカルな地域社会との関係性なども議論の焦点になっている。チンギス・ハーンの場合は政治の舞台において利用され、国際関係の歴史の大波に翻弄されてきたが、民族英雄が多かれ少なかれ政治的に利用されるとしても、その度合いは人物や置かれた立場によって異なってくるだろう。さらに中国の南北での相違や中国の枠組みを越える事例も指摘がなされたが、そうした点も今後深く掘り下げていく必要がある。これらはほんの一例に過ぎないが、歴史の資源化の全面的な解明に至るには、まだ端緒についたばかりなのである。

本書によって、中国における歴史とその資源化の現状について、研究の最前線から最新の事例に基づいて解明を試み、成果を取めたが、今後に残された課題もまた少なくなないのである。